

黒潮、火山、人によって多様化した南北600kmのみどり

寺 田 仁 志

はじめに

鹿児島県は日本一自然が豊かなところだと自信を持って言える。この自然は過去の方々の英知があって遺ってきたのである。

現在は過去があってあるものであり、未来は現在を受け継いでできるものである。現在私たちが享受している、優れた文化や自然は先人達の知識や知恵があって遺されたものである。私たちも未来に生きる人たちのために価値ある文化や自然を未来遺産として積極的に遺すべきである。

鹿児島県教育長を歴任し、鹿児島県歴史資料センター黎明館初代館長の伊牟田茂夫氏は館員に資料収集の重要性を以下のように言われたという。

「博物館資料は未来からの預かりものである。今後利用する県民のため資料の価値を認め、広く収集し、大事に保管せよ。博物館資料は現在の人のみのために供するものでなく、未来の人達から預かった過去を知るための重要な資料だ。」

同じように、現在自然遺産と言われているものは、傑出した自然で地域への思いや次の世代に伝えようとの願いが込められたものである。また、自然遺産は過去からの贈り物であるが、未来世代が、一時的に現世代に預けたものでもある。大事なものを預かっているわけだから、その価値を理解し、賢明な利用をして、次の世代に渡していくことが大事だと言える。

さて、鹿児島の自然の豊かさを考えるときその質が問われる。自然の場合は質を考えると、多様性の問題が重要である。鹿児島の自然は多様性に富んでいる。

鹿児島島の自然に多様性をもたらした要因は次の4点が考えられる。

- 1 南北600km、標高差2,000mの地理的変化が多様性を生んだ。
- 2 黒潮が多様性をもたらした。
- 3 火山が多様性をつくった
- 4 人によって多様性がつくられた。

以下、それぞれについて紹介する。

1 南北600km、標高差2,000mの地理的変化が多様性を生んだ。

(1) 日本で2番目に南北に長い

鹿児島県の南端は与論町チヂ崎で北緯27度1分6.4秒、東経128度26分37.7秒にあり、北端は長島町獅子島北の蜂の北緯32度18分16.8秒、東経130度15分2.1秒で南北に約600kmの広がりがある。緯度で5度17分というこの距離は、北海道より長く、東京都に次いで日本で2番目に長い。緯度の差は温度変化につながり多様性をもたらす要因である。一方、経度の差は気候にはあまり影響しない。

この緯度は亜熱帯から温帯に当たる気候帯を含んでいる。

(2) 熱帯と温帯の境界 渡瀬ライン

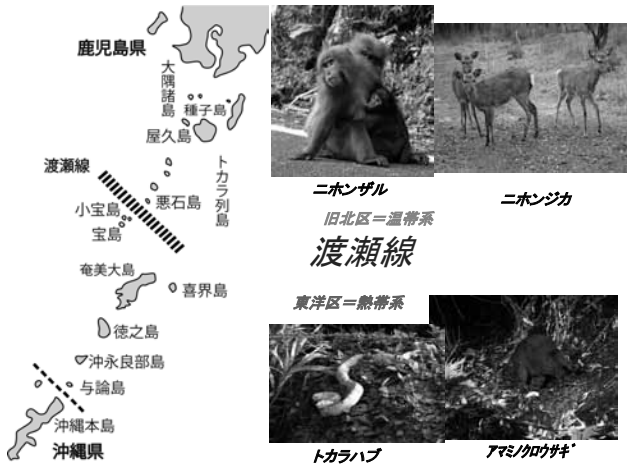
東アジアの動物分布で熱帯系のものと温帯系のものの生育境界はどこかということが20世紀初頭、議論になったが、日本生物地理学会を創設した渡瀬庄三郎は屋久島と奄美大島の間のトカラ列島に境界線があるということを大正元（1912）年に提唱し、渡瀬ラインとよばれるようになった。

この境界は、トカラ列島の中では①ハブの生息の有無、②氷河期以降一度も接続されなかったという地史的見地等から悪石島と小宝島・宝島間に引くのがよいといわれる。

植物地理学上も同様に、宝島は温帯性の全北区と熱帯性の旧熱帯区の推移帯で、植物相には両地帯の植物が南限種、北限種として多数含まれている。小宝島・宝島は南北600kmある鹿児島県、そして南北3,000kmある日本列島の中でも熱帯系の生物が棲む北限の島、熱帯の始まりの島ともいえる。

渡瀬ラインより北側（屋久島など）には温帯系のタヌキやシカなどが

黒潮、火山、人によって多様化した南北600km のみどり



棲み、南側（奄美大島など）には、熱帯系のハブ、アマミノクロウサギ、トゲネズミなどが棲んでいる。

この熱帯、温帯の2つの生物地理区分を持つ都道府県は小笠原のある東京都と鹿児島県だけである。

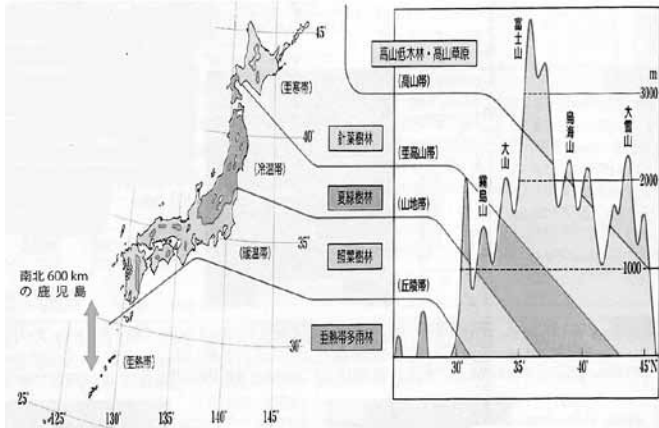
また、熱帯地域の沿岸はサンゴ礁で囲まれている。珊瑚礁が砕けた白い砂で囲まれた宝島以南の海岸部には海岸から丘陵地にかけては台風や季節風時の、きびしい海風と折り合いをつけながら独特の植生景観が発達している。このような景観があるのは沖縄と小笠原、奄美だけである。

(3) 垂直分布

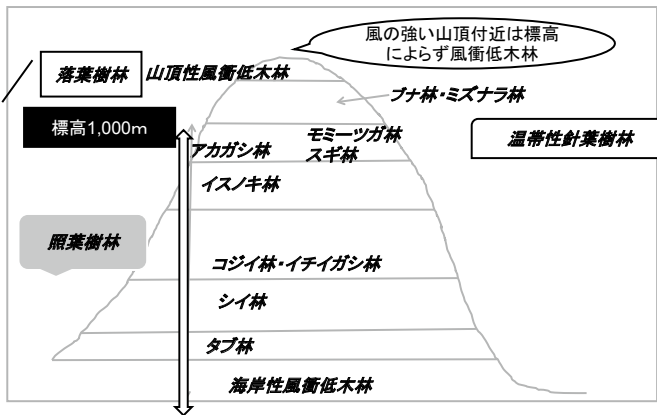
前に述べたように、鹿児島県は全国で2番目に南北に長く2つの気候帯を持つ県であるが、垂直的にも、九州で1番標高差がある。

世界遺産の島屋久島は、1,936mの宮之浦岳をはじめ1,000mを越える峰が30座以上ある。標高が100m上昇すれば年平均気温で0.5～0.6℃低下するため、海岸部は年平均気温が20℃を越える亜熱帯で植生はガジュマル林などの亜帯性常緑広葉樹林もある。少し高くなると暖温帯になり、植生は常緑広葉樹林の照葉樹林となる。標高1,200m付近では冷温帯の気候となりヤクスギ林が発達する。標高が最も高いところでは年平均気温が9℃前後で北海道釧路の平地と同じぐらい寒い気候になり、台風や

日本の植物の水平分布と垂直分布



鹿児島県本土の自然林の垂直分布



季節風時には荒れ狂うため、そこではヤクシマシャクナゲやヤクシマザサなどの風衝低木林がみられる。標高により3つの気候帯を持ち、それに呼応して植生帯も3種類ある。このように3種類の植生帯がみられるのは東京都と鹿児島県だけである。

なお、屋久島が世界自然遺産に登録された理由は屋久杉巨木林が遺っていることと、この見事な植生の垂直分布が連続してみられるというこ

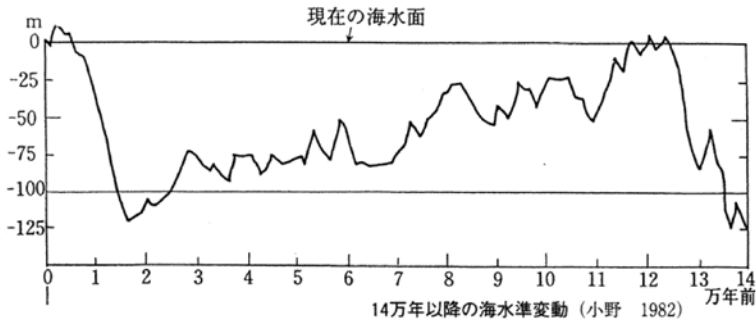
黒潮、火山、人によって多様化した南北600kmのみどり

とであった。また、県本土では前頁図のように1,000m以上で冷温帯気候となり、ヤクスギに変わってブナやミズナラなどの落葉広葉樹林の植生がみられる。

2 黒潮が多様性をもたらした。

鹿児島は地理的な特異性がある3つの気候帯があり、温暖、湿潤な気候で植物たちにとっては恵まれた生育環境になっており多様な植物を育んでいる。

(1) 鹿児島は照葉樹林のふるさと



今から1万5千年前（旧石器時代）は最終氷河期で、現在より日本の気温は7℃程度低くなったため、現在の海水面より120mも低くなっていた。種子島や屋久島は本土とつながり、日本列島は大陸とつながって日本海は大きな湖がつくられていたともいわれる。その時代の植生は鹿児島も次頁図のように、冷涼で低地部からブナ林落葉広葉樹林帯となっていた。また、錦江湾や阿蘇付近は火山活動のため、著しく植生が貧化し、乾燥したススキ等のイネ科植物からなる荒原となっていた。

ところが種子島、屋久島までを含む鹿児島の海岸部は、温暖でシイやタブノキ、カシなどを含む常緑広葉樹林、すなわち照葉樹林が広がっていた。それは、沿岸を暖流の黒潮が流れており、氷河期といえども温暖な気候が維持されていたからである。

この沿岸地帯は氷河期の照葉樹林の避難所とよばれている。縄文時代

想林第4号



最終氷期の植生図 (那須1985)

になると、温暖化がおこって、照葉樹林は各地に広がり、現在のように東北中部まで広がっていった。

現在も照葉樹林の自然林が残る屋久島、種子島、大隅半島は「日本の照葉樹林のふるさと」であり、ここから長い時間かけて照葉樹林が広がったことから、鹿児島県は照葉樹林のふるさとといえる。

(2) 鹿児島は縄文文化の発祥の地

南九州は黒潮のために氷河期も温暖で湿潤な環境であったと言われるが、中種子町大津保畑遺跡では3万年前の旧石器時代の火山灰層の下から日本で最も古い時代の落とし穴やどんぐりなどを碎くのに使われたとされる叩き石や石皿などが発見されている。また、薩摩火山灰(13,000年前の桜島の火山灰)層以前の地層から発見された日本最古級とも考えられる縄文土器が鹿児島市の加栗山遺跡から発見されており、定住生活をはじめた縄文文化の開花が見られる。

黒潮、火山、人によって多様化した南北600kmのみどり

また、霧島市の上野原遺跡では1万年前縄文早期の地層から、東南アジア原産のジュズダマが検出されていることからこの時代東南アジアから黒潮にのり、丸木船等を使つての交易手段があつたことが裏付けられる。

(3) 熱帯性植物の宝庫

鹿児島県に自生する植物の中には黒潮に流されて運ばれてきたか、あるいは人が黒潮を利用して運んできたものも多数ある。

たとえば干潮時には干上がり、満潮時には水没する潮間帯にできる森林＝マングローブ林をつくるメヒルギやオヒルギは鹿児島県が自生の北限となっている。特に鹿児島市喜入生見のメヒルギは特異的で、国の特別天然記念物に指定されている。

普通の植物は種子がつくられると休眠して、親植物から離れて別な地に移動し、しばらくしてから発芽して根・茎・葉をつくって徐々に成長していく。ところが、メヒルギ等のヒルギ類は、潮間帯という不安定な立地に生育するため、花を咲かせて受精し胚ができると、胚は親植物から養分を吸収しながら成長して苗状態になる（胎生植物）。鋭い鞘状の苗は落下すると、波に運ばれて、他所にいく。苗は水に浮かんで漂い、あたかもヒルが泳いでいるように見えるからヒルギと呼ばれる。苗はすでに葉も出ており、泥等に接すると発根し、短期間の内に立ち上がって

黒潮が運んだマングローブ林



ハマボウ



半マングローブ



サキシマスオウノキ



活着する。

屋久島や種子島などのメヒルギは黒潮に運ばれて南の海からやってきたのである。

同じように、ビロウ等のヤシ科植物、ソテツ、サキシマスオウノキ、ハマボウ等の潮流散布型の植物が鹿児島県まで分布を拡げている。特に潮間帯でなく、満潮線より高いところで生える半マングローブ林でハマボウが万之瀬川河口に、サキシマスオウノキが加計呂麻島、奄美大島に大きな群落をつくっている。

(4) 日本で一番多い特別天然記念物

「鹿児島の日本一」の1つに特別天然記念物が多いことがあげられる。特別天然記念物とは国宝級の天然記念物ということであるが、全国で75件ある中で7件が本県にある。

①喜入のリウキュウコウガイ産地 ②枇榔島亜熱帯性植物群落 ③鹿児島県のソテツ自生地 ④屋久島スギ原始林 ⑤蒲生のクス ⑥アミノクロウサギ ⑦鹿児島県のツル及びその渡来地である。

このうち①～③までは南方系の植物で黒潮によって種子や苗が運ばれたものと考えられる。また、世界遺産の島屋久島の屋久島スギ原始林も屋久島のすぐ南で黒潮が蛇行し、大量の水蒸気が発生し、日本でも最大

級の降水量をもたらすために長寿なスギをはじめ固有の植物を多産する多様性の大きな生態系ができあがったものといえる。黒潮がもたらした特別天然記念物の1つと考えられ、黒潮が鹿児島 naturally 自然に与えてきた影響は大きい。

3 火山が多様性をつくった。

(1) 火の国鹿児島 巨大カルデラの地

新生代四紀以降活動した巨大なカルデラは日本に9箇所（北海道3、東北1、九州5）あり、鹿児島はこのうち4箇所（加久藤、始良、阿多、鬼界）あることから鹿児島はまさに火の国と言える。

(2) 歴史の証人火砕流と火山灰

自然界に大きな影響をあたえる火山活動に溶岩流、火砕流、火山灰がある。影響する範囲が限定的なものから溶岩、火砕流、火山灰の順となる。

巨大火砕流も巨大カルデラから噴出したもので、始良カルデラからは入戸火砕流が薩摩半島中北部および宮崎県宮崎市まで流出し、特に大隅半島中部には広い台地を形成しておりシラスとよばれている。（26,000年～39,000年前）また、硫黄島・竹島付近にある海底火山の鬼界カルデラからは幸屋火砕流（7,300年前）が噴出し、指宿や錦江町の佐多・根占付近まで広範囲にわたっている。

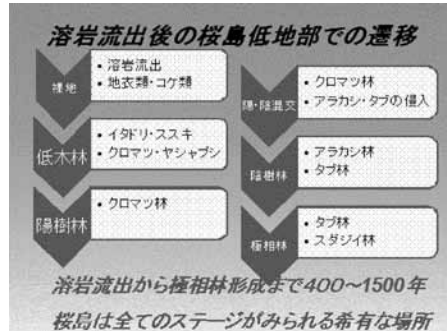
火山灰は更に広く分布し、始良カルデラの大爆発によって噴出したものはA-T火山灰とよばれ、東北地方北部や朝鮮半島でも確認されている。また鬼界カルデラからの大爆発（7,300年前）によって発生した火山灰はアカホヤ火山灰とよばれ東北地方まで分布する。

ところで、桜島は29,000年前に始良カルデラの大爆発によってできた錦江湾の南部外輪山上に26,000年前にできたといわれている。桜島の最も活発な活動の結果大量の火山灰が13,000年前に降り、その時の火山灰は「薩摩火山灰」といわれる。

これらの広く分布している火山灰は地層の時代を特定する鍵層として考古学の世界では重要で、鹿児島発の火山灰層は先史時代の時代区分の基準となっている。

(3) 植生遷移の教科書 桜島

火山活動は大きく自然を変える。溶岩流が流れると、そこは生き物の生存は難しい。しかし時間が大地を変えてくれる。時間とともに土ができ、そこに植物が進出し、動物がそれを求めて移動し生態系も豊かになってくる。暖温帯では冷えた溶岩上が荒地、草地、低木林、マツ林などの陽性の高木林、そしてタブノキ林やシイ林などの照葉樹の陰樹林へと変化していく。最後のステージである陰樹林の極相になるのに鹿児島でも千年あまりかかる。自然の移り変わりを遷移というが、それぞれのステージを1つの地域で見るのは難しいが、桜島ではごく間近に見られる。



鹿児島には現在も活動している火山が桜島だけでなく、霧島、開聞岳、硫黄島、口永良部島、口之島、諏訪之瀬島と多数あり、それぞれの地域に火山特有の自然がみられる。

(4) 火砕流が誘った植物—カワゴケソウ科

カワゴケソウ科植物は熱帯性の植物で増水時と渇水時に水位や流速の変化が激しい溪流に適応できるよう形態を変えた溪流植物といわれる。

水の抵抗が少なくなるように茎や葉は退化して痕跡程度になり、葉緑体は根に移動し根は流されないよう岩石にしっかりと張り付く。

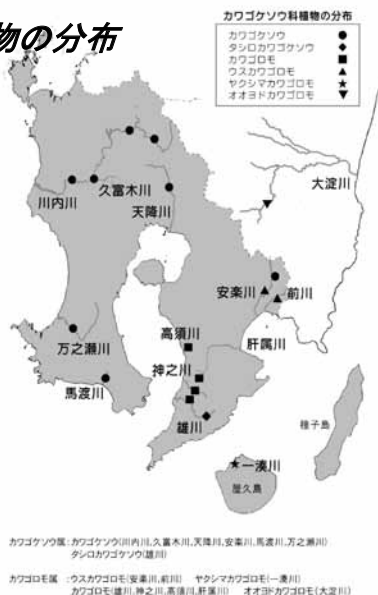
水深が1 m未満の開放地で秒速30cm以上の流速の速い水中に育成し、緩流域や止水域では繁茂しない。

熱帯性だが、台湾や沖縄県に分布せず、本県と宮崎県に分布する。日本にはカワゴケソウ属とカワゴロモ属の2属6種があり、河川によって次頁の図のように異なる分布をとる。

これらの植物は屋久島を除きすべて溶結凝灰岩の岩盤上に繁務する。溶結凝灰岩は火口から流出した火砕流が高温のために再び溶け出しその後固まって岩盤となったものであり、そこに生えるカワゴケソウ科植物

黒潮、火山、人によって多様化した南北600km のみどり

カワゴケソウ科植物の分布



は火砕流が誘った植物といえる。

花は花卉を持たず目だたないが、形態や生態、分布に著しい特徴があることから学術的に価値が高いと考えられ、鹿児島県は昭和29年に生育する特定の河川を県指定天然記念物に、国はこのうち、志布志の河川と屋久島のカワゴケソウ科植物の特定域をカワゴケソウ科植物生育地として天然記念物に指定している。

4 人によって多様性がつくられた。

現在みられる自然は、人の活動の影響を受け変化したものばかりで、人が全く入り込んでない地域は日本にはない。

(1) 植生自然度図

鹿児島は自然が豊かなところであるといわれるが、本当のところ鹿児島市の自然を見るとスギ林、耕作地が多く、自然林は少ない。

植生自然の質を基準を設け10段階で表したものを植生自然度といい、

想林第4号

その分布状態を示したものを植生自然度図という。環境省では第4回自然環境保全基礎調査（平成元～5年度）の結果をホームページで公開している。

これをみると鹿児島県の植生で多いものは植生自然度2の農耕地、6の植林地であることに気づく。9、10ランクの原生の植生に近いものはほとんどない。とはいえ、自然度8の自然林に近い二次林が多く、自然度9の自然林が奄美や屋久島、霧島などにまとまってあり、自然度は他県に比較するとかなり高い。

(2) 孟宗竹伝搬の地 竹林面積日本一

鹿児島県は植生自然度5にあたる高茎の草原も広い面積を占めている。この高茎の草原の代表であるモウソウチクは鹿児島県が日本の発祥地である。

元文元（1736）年＝将軍吉宗時代、薩摩藩第21代藩主島津吉貴が隠居の後、琉球（沖縄）に「孟宗竹」があるのを聞きつけて20株程を注文し、やっと5月になって4～5程（中空の茎の意＝本）立の2株が届き、この地に植えられたものであるとの記述が島津家古文書「仙巖別館江南記」にある。

沖縄には孟宗竹が育つ環境はなく、沖縄経由については疑われるが、仙巖園の2株は一旦仙巖園に植えられ、そこには江南竹林として現在も残っている。孟宗竹は在来の竹に比較して筍が大きく、食味もよく、桿も太く、生活素材としても有効に利用してきたため、県内及び全国に広がった。

いまでは鹿児島は竹林面積が日本一の県といわれ、県内各地の里山に孟宗竹林があり、新緑に置き換わる4月～5月には竹林の装いが大きく変化する様は見事である。

近年孟宗竹の需要は激減し、1年に地下茎を10m伸ばすといわれる旺盛な伸長力のため在来の植生をこわして周辺に拡大し、毎年竹林面積は広がっている。このことが生物多様性を減少させる要因として課題となっている。

(3) 南西諸島のリュウキュウチク林

竹といえば、三島から始まるトカラ列島では、遠くから見ると一面芝生のような緑に染まった景観がある。近づくと風で緑がそよぎ、高さが0.5m から5m の低木状の群落であることが分かる。

多くの島では牛の牧場として利用されている。かつては、各島特有の森林群落であったものだが、人が入植し、繰り返し火を使つての農業、焼畑を行ったためにリュウキュウチク林が広がったといわれる。リュウキュウチクは地上部は数年で枯れるが地下茎が発達し、養分を絶えず蓄えている。火入れによって地表部は数百度の高熱になるが、地下部は5cm も潜ると温度変化はほとんど生じない。このため地上部は燃えても、地下部から、芽を出し、樹木等の競争相手が少なくなった環境の中でいち早く成長する。このためリュウキュウチクの群落がつくられる。リュウキュウチクの地下茎は縦横にびっしりと広がり、一旦リュウキュウチク林が形成されると、地域本来の森に復するのに気の遠くなる時間を要する。

(4) 奄美のソテツ林

鹿児島県及び宮崎県本土のソテツ自生地は国の特別天然記念物に指定されているが、奄美諸島では、集落の外れの斜面にソテツ林が広がっているところも多い。これらのソテツ林は海岸の断崖絶壁ではなく、やや内陸部の集落や農地に接した急斜面であることが多い。ソテツは奄美の生活に欠かせない植物で、ソテツの実や幹からデンプンを取り、食料として重要であった。また、窒素分を多く含むその葉は緑肥として田や畑に投入されていた。このため、砂糖地獄であえぐ島民は耕作可能地はサトウキビやサツマイモを植え、耕作不適地の急斜面に自生地の海岸からソテツの実を取り寄せ植えたのである。

現在この栽培地で大規模なものを龍郷町の安木屋場や請島等で見ることができる。小高い山一つがソテツで覆われ青空の中で濃い緑が広がっている様は壮観である。

かつては、5～6月にはテル（竹製の背負い籠）に雄花の房をいれ、その房を取り出して雌株の側で振って受粉を促したり、秋にはソテツの鋭いとげとハブの出没を気にしながらのナリ（実）の収穫作業に追われ

る人々の姿があった。

海岸の断崖地と異なり、このソテツ栽培地は風が弱いので、ソテツの果実をとらなくなった現在、侵入した他の樹木種やツル植物に覆われ衰退しつつある。

(5) リュウキュウバショウ林

鹿児島県の風景の中で特筆されるものにバショウの存在がある。南大隅町佐多以南の南西諸島では谷部や山陰の斜面等にリュウキュウバショウの群落が点在している。奄美大島では龍郷町安木屋場で特に広がった場所があり、バシャ山と呼ばれる。風にそよいだ白銀の葉が波を打つ様子は優雅である。

かつてはその繊維をとりだし、紡いで芭蕉布をつくった。南西諸島の夏は蒸し暑く、さらさらした芭蕉布は地域の気候に合ったものだった。リュウキュウバショウは東南アジア原産の植物といわれ、黒い種子のある小さな実もできるが、実を食べるためでなく、繊維を取り出すために植えられたものである。

近年芭蕉布はつくられなくなり、バシャ山は手入れをする人もなく徐々に地域本来のタブ林等に変化しつつある。

5 自然遺産を次代に伝える。

このように鹿児島県の自然は、長い地球の歴史の中でつくられ、ヒトの影響を受けて多様なものが形成されている。環境に呼応しそこに住む生物は多様で、地球でも生物多様性が高いといわれる東アジアにあってもその選りすぐりの存在になっている。

今回の講演は未来遺産というテーマで行われているが、鹿児島の未来遺産として何を子孫に残すべきか、残すためにはどうすべきかということについて私見を述べたい。

(1) 原生的自然

原生的自然は今、鹿児島だけでなく日本には殆ど無い。明治以降爆発的に人口が増え、移動手段も飛躍的に発達し、全く人が踏み入れたことのない場所は存在しなくなった。それでも原生的と言われる自然が

残っているところとして、奥山では伐採するには危険を伴ったり、費用がかかりすぎたりするか、林業経済的価値が無く放置されてきた尾根部である。現在世界自然遺産に登録されている屋久島の山頂部は林業経済的価値が無く、又、縄文杉や弥生スギも、スギとしての素性が悪く伐採されずに遺されたといわれる。高隈山、稲尾岳も戦後の激しい伐採の嵐の中どうにか残った僅かな場所である。

ところで、里山では神山と言われる場所が在る。そこに神様が住み、そこを汚したり、木を伐採すると、神様が怒りその人に不幸が訪れたりするたたきがあると伝えられてきたところである。神山の立地環境の視点で見ると、水源地であったり、水害や土砂崩壊が発生しやすい場所であるため、災害から地域を守るため、神様を使って保護してきた場所である。神山は人の知恵によって遺されてきたのである。

奄美大島大和村大和浜には集落の後背に神山があり、崩壊しやすい中生代堆積層の急峻な裏山であるが、オキナワウラジロガシの巨木林が発達し地表を支え水源地ともなっている。また、宝島の集落の後背には山頂に帽子をかぶったようにウバメガシの巨木が被い、その下にはビロウが茂る女神山がある。そこは航海の安全を巫女達が祈り、水源地として利用された神山である。

このようにして残った原生的な自然は鹿児島の本来的な自然であるばかりでなく、現在の日本で失われてしまい鹿児島だけに残ったものもあり、日本の自然の「歴史の証人」といえるため、国の天然記念物として最近指定されている。

(2) 人が管理してきた自然

人が長い時間をかけて自然と関わり、折り合いをつけてきた自然の中にもかけがえのないものも多い。ソテツ山、リュウキュウバショウの山であり、野焼きや刈り取りをして維持してきた半自然草原といわれる牧である。

また、鹿児島では、かつて薩摩藩では軍事用の馬を飼育するための牧野が20数カ所あったといわれている。それらの地域や集落の入会地で茅葺き用の茅をとっていた場所も集落の周辺の里山の一角にあり、立野とも呼ばれていた。

日本は温暖で湿潤な環境が多く自然状態では圧倒的に森林が占め、草原は川、海岸、高山のごく一部だけである。人が管理してきた牧野は貴重な草地であり、そこには安定した固有の植生がある。千貫平（鹿児島市）や狐が丘（霧島市）、沢原高原（湧水町）などに残っている自然は貴重である。ところが現在沢原高原を除き火入れが行われなくなり低木林に遷移して草原は消えつつある。

- (3) 預かった未来遺産を次世代につなぐ—自然は未来からの預かりもの
私たちの環境や資源は今住んでる人達だけのものではない。過去に先祖が作ってくれた財産は、自分たちが浪費してしまうわけにはいかない。次の世代に引き継ぐべきものである。発想を変えると未来の子孫達の財産が現在の人に託されているわけで未来からの預かりものといえる。

これらの遺産は大事な財産であり、次の世代でも財産となることが所望される。今の財産が未来の財産として認識されるためには遺産の価値が理解されることが重要である。

遺産はその価値が理解されないと、遠くに押しやられ、管理がなされず気づかないうちに、生きものを含む自然遺産であれば、死んだり、枯れたり、傷ついたりする。

自然遺産そのものの性質を見極め、遺産の持つ価値を理解することが大事であり、そのためには遺産に親しむことが大事である。

- (4) 遺産に親しむ

遺産はその存在が理解されないと、その価値は理解されない。まず、自然を知ること。知るためにはその場を訪れること。そして、そこで観察するだけでなく生きものにふれる、ときには食べる、など自然体験等をおこなうことにより身近になり、その価値が理解される。オーバーユースにならない程度に、再生可能な程度を見極めながら、元本に手をつけず、利子分を理解して利用することが求められている。

- (5) 自然遺産は地域の誇り

人は地域の環境に支えられて生まれ、育ち、現在がある。自然があっ

黒潮、火山、人によって多様化した南北600kmのみどり

て人は生きていける。自然に支えられて文化が生まれる。地域の自然を大事にすることは地域の文化を守ることにもつながる。未来遺産は人の文化であり、地域の自然である。

地域住民だけでなく地域から離れ他所へ行く人も、地域の文化や自然を背負っている。人は住んでいる地域、生まれた地域について第三者に価値が認めてもらえると、自然に笑みがこぼれてくる。文化や自然は地域の誇りである。未来遺産として地域の自然、文化を継承することは私たちのアイデンティティーを確立する重要な要因でもある。

(鹿児島県立埋蔵文化財センター所長)